みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

映像民俗学のこれから：映像資料の電子メディア活用の試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 茂木, 栄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001975

大森康宏編『マルチメディアによる民族学』
国立民族学博物館調査報告　35:65-81(2003)

映像民俗学のこれから
映像資料の電子メディア活用の試み

茂木　栄
國學院大學　助教授

1　問題の所在
2　映像のCD-ROM化のメリット
3　金のかかる業者委託
4　自作のCD-ROM製作
5　今後の祭礼に関わるCD-ROM製作の方向と目的
6「見付天神裸祭」のコスモロジーCD-ROMの内容

1　問題の所在

これまで，映像民俗学，映像人類学を視野に入れ，祭祀調査研究を行ってきた。その研究成果を生かして，主に祭祀についての分析的映画や記録ビデオを制作してきた。こうした映像ソフトを授業に活用する（視聴覚教育の）メリットは今さら説明するまでもないが，しかし，実際の大学の授業においては，いかに編集製作を独自に行った映像ではあっても，一本の完結した映画やビデオを上映するということは，最初から最後まで意図をもって編集された作品として，学生に対して一方向的にみせざるを得ず，教員の説明を映像の合間に挟むことがむずかしく，解説の「しにくさ」を感じてきた。上映途中でビデオを止めて説明することもあるが，映像の流れを中断させ，かえって学生の理解を妨げる結果になるのではないかとの危惧を感じている。

①教員が主体的に授業をリードしてゆくことが映画やビデオ教材活用では必要である。こうしたビデオ教材活用に対する教員の主体性の問題は，②等しく同僚教員達の抱える問題でもあった。③自作の映像（主にホームビデオ）作品を授業に活用することが増えてきたが，趣味的教材と見られがちで，さらに主体性のなさに後ろめたさを感じる教員が増えると，④「映像を使って授業で楽をしているなどと思われるのではないか」という大袈裟にいえば脅迫観念にさいなまれることになる。

その対策として授業時において，映画・ビデオの鑑賞以外では，①ごく短い映画・ビデオ映像しか教材として使わない。②動画ではなく，音声のないスライドを相変わらず使い続ける，という従来型の視聴覚機材の使い方から踏み出せないでいる。

問題の解決には，映像を使った授業においては，教員の主体性をいかに確保するかにかかっている。

2 映像のCD-ROM化のメリット

教員の主体性を確保する方法が，映像のCD-ROM化である。項目毎の映像の分節化が可能であり，文字と動画，写真，文献資料，データ，グラフなどを同一次元上に表示できるメリットは今更説明するまでもないが，これに加え，映像の構成を立体的に組み上げることができ，さらに，より分析的な構成が可能である。

映像が分節化されていることによって，教員の映像解説への主体的かかわりが可能となっている。また，教員の指示により，学生それぞれのパソコン操作で，映像と解説をモニターに表示させることができ，学生の授業への参加意識も高まることがわかった（参照：学生へのアンケート）。また，実際には教師の主体性云々の問題より，ビデオとの併用により，学生にCD-ROMそのものの操作を委せて自由にやらせることで，興味を発展させられることがわかった。

上記の理解は，私達の製作した映画（「見付天神裸まつり――海と山との交歓」國學院大學日本文化研究所・民俗文化財研究協議会共同企画制作 1987）を基にしてCD-ROM作品の試作品を授業に活用してみた結果である。

CD-ROM化した映画作品を教師が解説しながら映像を呼びだし，静止させたり戻したり図を表示したり，マウスの操作1つで自在に活用し，視聴覚教材を使った授業での主体性を確保できるという実感を持つことができたが，果たして学生はどう感じたのであろうか。その後で基の映画作品を見せたのである。学生の評価はCD-ROM授業に対し概ね好意的であったが（目新しさに対する期待は大きいが，映像の質に対しては厳しい意見が多かった），映画作品の雰囲気や情緒的理解が損なわれるという批判的意見も少なくなかった。「神道と生活」「神道と文化」という全学部履修可能な主題講座と，神道学科の「祭祀学研究」という演習において，約200名の学生を相手に自由記述させたものである。以下はその中の幾つかの紹介である。

① CD-ROMの方は将来的に色々と改良される部分もあるでしょうが，映画と比べても融通がきいて多角的に勉強できるという点で，非常に有益なのではないかと思います。画面の文字や図が小さくて見にくいのが残念でしたが（日本文学科3年，男）。

② 映画は1つの作品として見るのに良かった。私はCD-ROMの方に興味があります。良く作られていると思う。映画を見ていて「聞き逃した」というところや，「もっと詳しく知りたい」というところを見ることができる。確かに映像を取り出すのに時間はかかるが，私は気にならないし，改善できると思う（産業消費学科1年，女）。

上記の意見に代表される概ね好意的な意見が多かったが，CD-ROMの映像や文字が小さいことや，映像の引出しに時間がかかることなどの不満が記されていた。さらに，CD-ROMの弱点である，情緒・感動の表現と伝達という点で，映画には及ばないとする意見もあった。幾つかを記してみよう。

③ 躍動感あふれる祭の映像を見て，とても良く作ったと思った。日本のお祭りは宗教的なものであることがわかるようになった。日本の文化は神道から始まる事実も感じた。映画の映像は時間的余裕があるときゆっくり見るのは良いと思ったし，CD-ROMは教育をするとき良いと思った。質問などを受けたとき，ひとつひとつ取り出して説明するのは簡単で便利だと思った。すばやく取り出す方法を開発すれば最高でしょう。でも人を感動させるのは，映画の映像かも知れない（日本文学科1年留学生，女）。

④ 一連の流れを追って見られるという点で，映画はとてもわかりやすかったです。説明もきちんと入り，何よりもかけ声とともにの映像は迫力がありました。海と山をつなげて町で交差するという行為は非常に精神性を高めるように感じました。CD-ROMの方は，すぐに画像が出てこないめんどう臭さはあると思うけれど，自分で好きにピックアップして見られ，早送りも逆戻しも容易な点が良いと思います。私的には，迫力を印象として全体に感じられる映画の方が気に入ったのですけれど（哲学科1年，女）。

CD-ROMの方が良いとか，映画の方が良いとか優劣を付けるのではなく，両方を併用して使うのが最も良い方法なのではないかという至極もっともな意見も散見した。

⑤ 映画もCD-ROMも両方面白いと思います。映画の方は物語的で，雰囲気がとても良く伝わってきたし，筋があるので楽しめました。夜明かりを消して暗闇にするというのが，私にはとても興味深かったです。CD-ROMは，見たい部分がすぐ詳しく見られるという点で良いと思います。映像も音声も入っているから，見る方も楽しめるし，私はどちらがいいとかいうより，両方をうまく使えばベストなのではないかと思いました（日本文学科1年，女）。

⑥ 映画の方は情緒的に訴え，流れが途切れない点において，頭の中で再び視覚化できる点が長所だと思うが，解説と映像が一緒に流れているため理解しにくい部分があると思う。一方CD-ROMの方は映画と比べて，流れが途切れるため，見ている人が退屈し易い短所はあるが，そのことについて深く知りたいと思っている人にとっては，映画よりもより効果的なものだと思う。最後に一長一短があると思った（哲学科1年，男）。

⑦ CD-ROMは良くできていたと思います。もう少しメモリーの多いコンピュータを使えばフレーム数を増やしてスムーズな映像が得られると思います。裸まつりを非常にわかりやすく時間経過など分析できていると思いました。映画は，身体にダイレクトに染み込んできます。ただ，一回見ただけでは祭の全容を論理的に捉えることはむずかしい。始めに映画，その後でCD-ROMで講義するのがベストだと思います（史学科2年，男）。

また，授業用としてCD-ROMを教師が使うのではなく，学生ひとりひとりに与え，自由に操作させることで，学生が主体的に興味を持って学ぶという意味で，大学の授業方法に変革をもたらすのではないかという意見が多く見られた。こうした点がCD-ROMを製作し活用する授業の，授業を受ける側の特筆すべきメリットとなるのかも知れない。

⑧ CD-ROMを使った授業の評価――映画は解説などがほとんど音声のみなので，見る＋聞くであるが，CD-ROMの場合は文字の解説が加わる。CD-ROMの方が上に見えた。しかし授業で投影して使うとなるとCD-ROMは文字が小さすぎて見えなかった。これがCP教室などで1人1人がCD-ROMを使えるようになれば，授業の方法が変わるかも知れない。使用方法によってはかなり使えると思う（神道科4年，男）。

⑨ CD-ROMを使った場合，自分1人で使用して，行事の詳細や画像を見たり調べたりするには面白いと思う。しかし，このまま授業に使うとなるとちょっと問題がありそうです。まず，文字情報の類はもっと減らした方が良いと思います。なるべく図表や映像のみを画面に出し，文字による情報はレジュメの形で手元に配った方がわかりやすいでしょう。画面で文字を見るのは不自然です。そして，図表と動画は画面の左右に出し，いつでも対応させて見られるとわかりやすいでしょう（史学科3年，男）。

⑨の意見は，従来型の視聴覚授業との折衷案と見られるが，映像機器を使った授業を学生が好むのは，教師の意図する理解のし易さよりもむしろ，興味が涌く，楽しさを感じるというところにあるのではないか。次の記述はCD-ROMを使った試みの授業に対する学生の本音が書かれているように思う。

⑩ この映画とCD-ROMを見せていただいて感じたことは，わかり易くできているなということでした。神道に関することは，私にとって（私達の世代にとって）率直にいってとっつきにくい事柄です。そのようなものを，映像やコンピ

ュータといった媒体で伝えてくれると，ある程度の興味も涌いてきますし，何より理解も容易になると思います。今日の映像等を見て，伝統的神道行事に興味が持てました。楽しい授業でした（外国語文化学科2年，女）。

というものであった。

3 金のかかる業者委託

CD-ROMの製作に取り組む前に話を戻そう。映画作品を授業中にどのようにアレンジしてCD-ROM化したらよいか，構成表とシナリオを漠然と考えていた。私の場合，この構成表とシナリオをもとに，CD-ROMの製作業者を探したのであるが，たまたま「日本の祭」という写真のCD-ROMを製作中の業者から内容についての接触があり，ついでに話を聞くと，「静止画をアレンジしてCD-ROMを製作するには800万円くらいかかるが，相談に応じます。」とのこと（正直驚いた）そうした折り，国立民族学博物館での共同研究員に加えていただいていた大森康宏氏主催の「新しい視覚情報開発のための民族誌映画の分析と活用」プロジェクトで，議論と研究会を重ね，民俗誌に関する映画活用の今後の発展の1つとして，映像のデジタル化とCD-ROMの製作という方向性が出てきた。これを機会に自分でコツコツと作ってみようということで，どういう機器・機材が必要か調べることから始めた。

4 自作のCD-ROM製作

さて，自作の視聴覚教材映像をCD-ROM化するためには，映像をどのように組み上げるか，またどのように解説シナリオを構成するか，構成図を作らなければならない。厳密な構成図ができれば，後は作業であるが，パソコンの操作は，素人には大変むずかしかった。それで国立民族学博物館でお世話になっていた中山雄介氏（東京経済大山中研究室出身）に来ていただき必要な機材，手順と操作をお教えいただき，試作品の制作に漕ぎつけたのである。

揃えた機材――ハードウェアーとソフトウェアー――は以下の通りである（平成9年11月）。

ハードウェアー

①パソコン本体（パワーマック7600）	198,000円
②モニター	69,000円
③外付けHD	37,800円

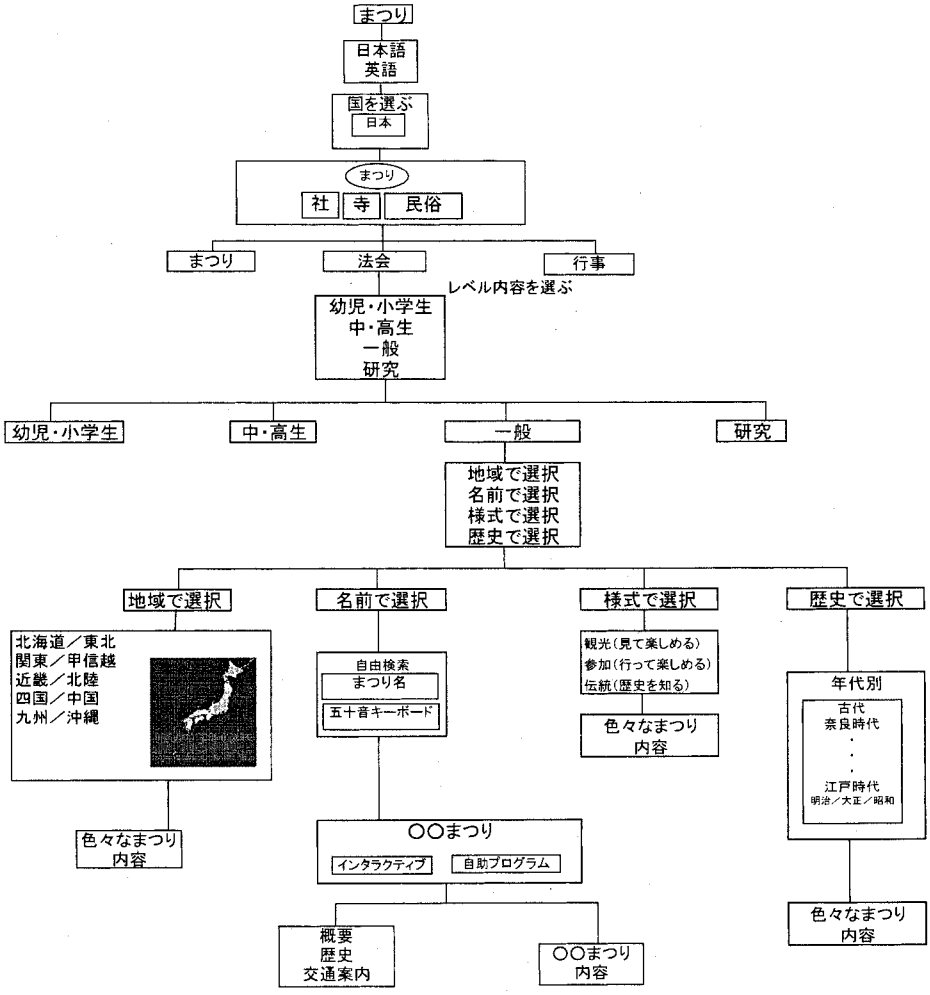
④CD-R	81,800円
⑤フィルムスキャナー	76,800円
ソフトウェアー	
①フォトショップ	84,000円
②プレミア	69,800円
③ページミル	9,800円
④クラリスワークス	14,990円
⑤ネットスケープナビゲーター	4,630円
その他	19,330円

以上のように基本的なCD-ROM作りは合計金額665,950円の機材投資で済んでいる。また，CD-ROMを自作すべきと主張する背景には，①上記のように業者を介在せれば莫大な費用がかかること，②研究教育活用として思い描くデザインと業者のやり易い作業との間に齟齬が生じ易いこと，③今日では比較的容易に機材を整えることができ，CD-ROMの製作も容易になってきたこと，④これまでに民族学・民俗学研究者は豊富な研究映像ソフトを製作蓄積していること，⑤研究者間の映像データの交換をインターネット，CD-ROMで行うようになるであろうこと，⑤広くインターネットでの成果の公開を視野に入れたとき，製作委託業者に製作権料支払いの請求が出される可能性があるなどの理由による。

5 今後の祭礼に関わるCD-ROM製作の方向と目的

①教育活用（学生研究者用・子供用），大学教授のみならず，小中学校のパソコン教育教材としての活用（特に地元小中学校）を視野に入れる。民族学・民俗学への興味の底辺の拡大。②日本の祭礼文化の紹介（インターネット用にHTMLで記述）。

このデータは，HTMLで作られているため，通信ソフト（ネットスケープ，エクスプローラ）で見ることができる。容量は約80MBと大きいが，インターネットにのせることができる。まだ，これは試作の段階であるが，今後，英語版，中国語版，フランス語版，ドイツ語版，韓国語版，小中学校用等を補助金の獲得状況に応じて進めて行く予定である。今後個別の祭礼データを集積，統合し以下のような構成の祭礼動画映像データベースを考えている。



6「見付天神裸祭」のコスモロジー CD-ROM の内容

今回「新しい視覚情報開発のための民族誌映画の分析と活用」プロジェクトで製作した CD-ROM に入っている。“「見付天神裸祭」のコスモロジー”は，個別作品の 1 つであるが，まだ完成品ではなく，個別作品の一部でしかない。

この作品の内容についての解説は CD-ROM を参照して下さい。最後に中国語の解説を付けているのは現在，中国語版と英語版を製作中だからである。

文　献

金子朝生
1994 「ハイパーメディアの研究動向」『情報処理学会誌』34（1），60-71。
クロスメディア・茂木栄
1998 「『まつり』マルチメディアコンテンツ制作及び技術開発支援申請書」（非公開），1-10。
茂木栄
1999 「祭礼のCD-ROMを製作して」『國學院大學日本文化研究所報』36（1），3-5。
宇野正人
1993 「データベース作成の基礎的研究――特に民俗芸能を事例として」『江戸川女子短期大学紀要』8，72-78。

資料　中国語版 CD-ROM（製作中）の解説文

远江总社淡海国玉神社 * 见付天神裸体舞简介

园田　稔　　（京都大学名誉教授）
茂木　荣　　（國學院大學）
翻译者　焦叔斌　　（人民大学）

目录

序
一 矢奈比卖天神裸体舞的写实

1 祭祀的开始　　（旧历八月初二）
2 滨垢离　　（旧历八月初七）
3 神社院内的洁斋活动　　（旧历八月初九）
4 宵祭　　（旧历八月初十）
5 本祭　　（旧历八月十一）

二 见付天神裸体舞中所蕴涵的宇宙论

序

静冈县西南部，面向远州滩一带，有一座人口约八万人的小城，这便是在该静冈县规模第九的磐田市。磐田市的见付町自古以来就是磐田市的文化中心，这里举行见付天神裸体舞。

见付町一带古时曾作为旧东海道的驿站而兴盛过。常夜灯、一里冢的遗迹现在在城中也随处可见。正如画家安藤广重在其作品＜东海道五十三次＞中所描绘的海岸风景那样，见付町紧临大海，发源于诹访湖的天龙川的入海口就位于这里。

祭奉本地氏族神（矢奈比卖命）的矢奈比卖神社位于城端的树林茂密的小山上，过去每年的旧历八月初二至八月十一之间要举行例行的大祭活动。现在将离旧历八月十一最近的星期日这一天定为每年的本祭日。

因为这神社合祀天神，因而被当地的人们称为天神裸祭。实际上，在江户时代，矢奈比卖神社就曾被称为天神社。由于在延喜式神名帐中記☆为矢奈比卖神社，所以后来又重新恢复了原名而一直延用至今。

《关于疾步太郎的传说》

关于这个神社，流传着一个疾步太郎降伏狒狒的传说。据相传，古时，当地的人们每年必须在这个神社中将女孩子作为供品奉献给一只可怕的怪物狒狒。有一次，一个旅行在外的名叫六部的和尚，听说那个吃女孩子的怪物最害怕信浓地方的一个叫疾步太郎的人，于是他就逆天龙川而上去请求帮助。一直来到信州秋叶街道的驹个根光前寺前才知道，原来太郎是寺里的一只灵狗的名字。他把狗借了出来并带回了见付，这只狗漂亮地除掉了怪物。见付的人们闻讯欣喜若狂，欢呼雀跃地跳起了庆祝的舞蹈。相传，裸祭就是从那时开始的。据说当时所跳的舞蹈便是现在男人们裸身而跳的“鬼舞”。

一 矢奈比卖天神裸体舞的写实

1 祭祀的开始 (旧历八月初二)

祭祀元天神(山里)

日待(神社的森)

降御柴(町)

2 滨垢离(旧历八月初七)

奉献命鱼(村里)

松林放生会(海里)

海滨清祓(海里)

行礼(神社的森)

3 神社院内的洁斋(旧历八月初九)

御池清祓(神社的森)

4 宵祭(旧历八月初十)

祭祀典礼(神社的森)

神舆出行(神社的森---町)

5 本祭(旧历八月十一)

祭祀典礼(町)

还御(町—神社的森)

(旧历八月初二) 祭祀的开始 (现在是在宵祭的六天前)

“祭祀元天神”(山里)

下午，由矢奈比卖神社的神职领头，役员、先供们(御舆出行时走在前面引导的人)一道从天神社(矢奈比卖神社)前往元天神社。穿过元天神社入口的牌坊“鸟居”，列队进入社殿。这一天是元天神社的

祭祀日，天神社的神职役员们就位后祭祀活动便正式开始。这里的祭祀结束后，身穿白衣的先供们要在神社院中采集十几条杨桐树的树枝带回去。

元天神社位于天神社对面的一块称为“原”的台地上，古时四周整个被茂密的森林所包围。这块台地在未开垦之时，一直是当地的共有山林。

矢奈比卖天神裸祭便是从这个山上神社的祭典开始的。

“待日”（神社的森）

先供们（约四十人）傍晚，在天神社内的梅光殿内集合，共进晚餐。在这里，要通过抽签来决定由谁来担任从元天神采来的杨桐枝“降御柴”的任务。这里的活动被称为“待日”。此后，大家再次回到神社本殿，共同进行将供米包在日式传统纸中的作业。

“降御柴”（町）

晚上十点钟，宫司、神职、先供们在天神社本殿进行祭典。在祭典的最后，“降御柴”依次交到先供们的手中，然后开始向町出发。这时，以焰火为信号，全城的灯火同时熄灭，伴随着“嗷兮、嗷兮”的喊叫声，“降御柴”的队伍如同风一般在黑暗中一路快跑町。穿行中，将在社务所、“大鸟居” 牌坊、井户、爱岩下、元门、三本松御旅所、东坡梅树、总社门、西坡梅树、川原入口、横街土桥、天王御旅所、虎屋前共十三处场所树立起杨桐枝、诵祷文。整个这一活动总共要持续大约三十分钟左右。

（旧历八月初七）滨垢离　（现在为宵祭的三天前）

“奉献命鱼”（村里）

一大早，住在见付今浦川下游大原区的大杉家族的户主就要在今浦川中撒网，捕捞一种称为“鲻鱼”的淡水鱼。这已成为大杉家每年的惯例。捕来的鱼称为“命鱼”，将用于松原的放生会。鲻鱼随后将由先供的代表来领走。

“松原的放生会”（海里）

此后的祭典在磐田市鲛岛海岸上的松林中用标桩围起的场地上举行。祭典由向神灵供奉命鱼开始，这个仪式象征着要将一年中因杀生而积下的污秽清除掉。祭典结束后，桶中所盛的鲻鱼要由两名先供担到附近的水池中放生。故以此而得名为放生会。

“海滨的清祓”（海里）

在两名先供将命鱼放生的同时，神职、神社役员、先供们一起来到海岸，立起神篱，在海滨进行清祓。即通过将海神迎入神篱中，使人们的身心得到净化。所有人在神篱中围坐成半圆，用棉、纤维等做的币帛束抚过身体后，再将之插在沙滩上。这象征着将身体的污秽都转移到了币帛束上。然后，一位神职游向海湾中去取来海水。紧跟着先供们也进入海中，一边清洗身体，一边往回采集石头、沙子和海水。

“滨垢离”(海里)

此后，等待在海岸上的市民们开始按照居住区顺序进入海边浅水中沐浴净身，这称为是滨垢离。见付町二十三个居民区有伍千人以上参加这个活动。为此活动包租的大型游览汽车就有六十多辆。

完成滨垢离之后，每个居民区的人们开始一起回到与海滨临接的松林中，打开自带的食品，开始吃喝游玩。有唱卡拉 OK 的，也有跳舞的，热闹非凡。

《旧时的滨垢离祭典》

因为河道改修的原因，现在到海边来变成了利用大型游览汽车。过去人们则是乘坐着带篷船从流经见付町中心的今浦川顺流而下，一路上用笛子和鼓吹奏着热闹的伴奏音乐。回去时，从大原一带的桥上或岸上会不断有人向船上招呼，“栗子糕喽，”或是“煮芋头喽”等等。此时，船就会靠岸田芋头交换和稻草。据说这象征着山里的好运同村落的好运的交换。宵祭时人们穿用的腰蓑就是用这种稻蓑所作的。

“道谢仪式”(神社的森)

进行过滨垢离回来后，孩子们要在傍晚到见付天神社去举行道谢仪式。在神社的本殿前，孩子们按照居住区列队做着模仿的游行。

(旧历八月初九) 在神社院内的洁斋 (现在在宵祭前夜举行)

“御池清祓” (神社的森)

宵祭的前夜，在神社院内的御池中央竖立起杨桐，为祭祀作最后的洁斋。御池清祓开始时先在御池前摆放祭坛，将举行滨垢离活动时所采集的沙子、石子和海水供奉在祭坛上。神职首先为役员、跳浦安舞的少女们和先供代表做清祓仪式，然后依次清祓神舆、神社本殿的四方、神社院内、“大鸟居”牌坊，最后将沙子、海水和杨桐树枝放入今浦川中，再回到御池前。

到此为止，见付町全城变成了“降御柴”的圣域：滨垢离使得每一个子民的身心得以净化，而御池清祓则清洁了神社以及整个神社院内。现在只需等待本祭的开始。

(旧历八月初十)宵祭 (现在为旧历八月初十最近的星期六)

“祭祀典礼”(神社的森)

上午十点左右，在神社本殿举行祭典。此后，各居民区忙着制作各自的旗帜，集会地点的会所等等。到了下午，许多的售货棚车也都开张了。

“儿童们的游行”(从町到神社的森)

下午六点左右，裹着腰蓑的赤裸着的孩子们按照居民区为单位前往天神社参拜。完了之后再接着列队游行至城中的总社参拜，参拜结束后回到各自的居民区。

“成人的游行”(从町到神社的森)

晚上八点左右，人们在各个居民区之间互相打招呼串连。

到九点左右，焰火开始升上天空，以此为号，青年们裸体围着腰蓑，开始从各自的会所出发走上街头。各区的人们合流在了一起，人数越来越多。全城编成了四个团队，每队的最前头由点燃了的独特的集束绘画灯笼作先导，按照事先安排好的路线来回游行。边游行边摇铃的居民区是将在神舆出行时担任触番(触番是跑在前面摇着铃铛提前通知神舆到来的角色)的居民区。晚上九点到大约十二点之间，裸身的男子们在见付町中从头到尾又从尾到头来回游行着，到晚上十一点十分到十一点四十分左右，四队人马根据约定要陆续汇齐在神社的拜殿处。

“鬼舞”(神社的森)

晚上十一点以后，看热闹的人们便纷纷拥挤在了神社拜殿的周围，翘首企盼着裸男游行队伍的出现。首先映入眼帘的是以境松居民為首的西区的集束灯笼，瞬时间西区的队伍奔入了院内，开始由左至右地绕着圈子。接着，每隔十分钟，就有一支举着灯笼、摇着铃铛的其他三个地区的队伍拥入进来，不久，院内就变成了由被汗水湿透了的裸身男子交织在一起所形成的汹涌的波浪。拜殿内弥漫着的灼热的水气和浓郁的腰蓑稻草味似乎要将人窒息。古时候的人们无疑也是因为被这一裸男群舞所表现出来的沸腾澎湃的巨大力量所震撼而将之命名为“鬼舞”的吧。

鬼舞的这种近乎白热化的状态同秘祭中渡神舆时必须熄灯禁声以图谨慎的场面相比较，形成了多么剧烈的对照。

鬼舞到达最高潮时，一个举着杨桐枝的人进入拜殿，用杨桐枝左右敲打着殿中的裸身男人们，开出一条通路，为神舆的起行做好准备。

拜殿深处的神舆前，供奉着放在驾笼中的栗子、山芋，作为代表山珍的供品，同时还有从海里捡来的生肖的石头围在神舆的周围。一名先供来到本殿天井附近立着的称为触枝的杨桐枝处将之放下来。

八个铃铛开始响起，神舆出行的仪式正式开始。

“山神社的祭祀活动”(神社的森)

山神社就是境内社，宫司、神职提前从拜殿出来，在山神社里主持祭典。一位神职将触枝在山神社前洗净后，再将之交给第一区(第一触)。举着杨桐枝跑在前头的人被称为御山，跟在他后面跑的还有十几人。在回复了平静的町，回响着触番的喊声：“第一触喽！”随着在山神社中第二触(第二区)接到触枝的同时，全城的灯火便要全部熄灭。

“神舆出行”(从神社的森到町)

在漆黑之中，在下山的第三触身后，紧随着身著白装拿着各自的道具的先供、神职以及神舆。这便是在黑暗中象风一样穿行的神舆出行。目的地是作为御旅所的远州总社、淡海国玉神社，抬来的的神舆将安放在总社的拜殿中。此后，在跳鬼舞时男人们所佩戴的腰蓑也将交到总神社的院内。

此时，已经到了第二天早上的一点钟。

(旧历八月十一)本祭(现在是在离旧历八月十一最近的星期天)

“祭祀典礼”(町)

这一天是本祭，平时总是很清静的总社只有在这一天才挤满了前来参拜的人们。在下午两点左右，将在总社举行具有规定形式的祭典活动。

“还御”(从町到神社的森)

在日头西下时，还御的队伍从总社出发面向町边的境松而去。町的人们走上街头来迎接神舆。等队伍走到最西头的境松时，天已经完全黑了下来。在西坡和东坡处，人们献上神酒并奏诵祝词。在街道两旁手提灯笼的人们的注目下，神舆到达城东端的三本松处，在这里要进行一个小型的祭祀。此后，从三本松将一口气登上天神社。神舆一通过疾步太郎的塑像，便会被抬上肩头，一口气登上去。町的人们聚集在社殿前迎接着神舆的到来。神舆将绕社殿沿顺时针方向转圈，转回到正面后，将再三地上下颠动许多次。送行的人们将会爆发出兴奋的掌声，这是个非常感人的场面。神舆进入拜殿后，移灵便告结束，这也意味着整个祭典的结束。

“洗山雨”

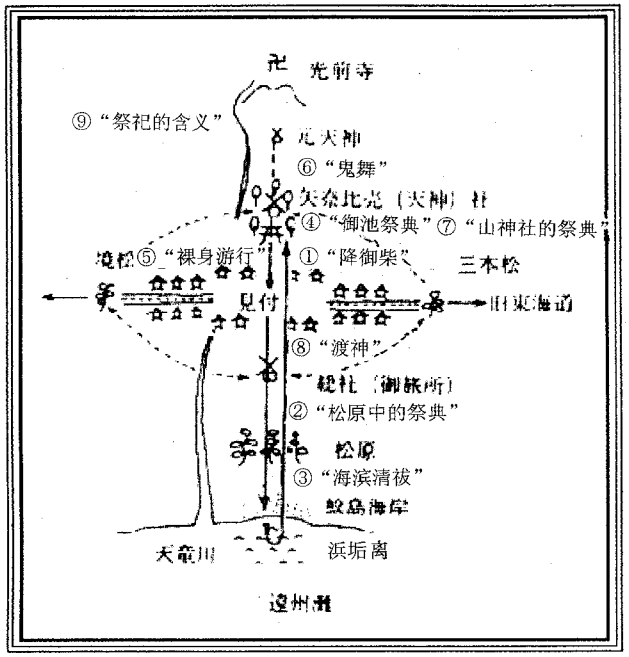
祭祀结束后，必定会下场雨。据说这是清洁身心的降雨。见付的人们把这场雨称为“洗山雨”。

二　见付天神裸体舞的宇宙论

让我们结合到此为止所记述的祭祀活动的构成，来分别探索其蕴涵的意义。首先我们来看一下见付町所处的地理位置。过去的见付驿站位于东西延伸的东海道沿线上，其北靠山地，南面是海拔较低的田园地带，再往南则与远州滩沿岸的漫长的松林和沙滩相接壤。

场面图

（敲击号码便会出现相应的图像）



①“降御柴”

在祭祀见付天神之前，首先要对元天神进行祭祀。此时所采折的杨桐枝将用于夜里的降御柴活动。在神治时代，通过将杨桐枝作为山的象征树立在城中旧东海道的各个重要的场所，使得见付驿站化身为神圣之地，全城随之进入斋戒期。

②“松原的祭典”

在举行宵祭的三天前，要在海岸的松原举行鱼的放生会。象征着对人们杀生罪孽的清祓。

③“海滨清祓”

此后，在海滨沙滩上将山上采折来的杨桐枝树立在沙滩上作为神篱进行祭典活动。人们纷纷进入海滨的浅水中用海水沐浴，清除身心的污垢。见付的这种滨垢离祭典是由数千人参加的盛大敬神沐浴净身活动。

④“御池祭典”

这是在宵祭的前一天，在见付天神社中通过抛撒从海滨采来的沙子和海水来清祓社殿、神社院内和整个城中的祭典活动。也就是说，到此为止所举行的祭神活动使山的神灵从山里降临到了城中和大海。同时，又从大海中把海的神灵招请到了城中和山上。如此而使得山的灵气同海的精气在城中交错相融在了一起。

⑤“裸身游行”

这便进入了祭祀活动的高潮。白天在神社中举行定例的盛大祭典。夜间的祭祀活动开始于裸身的男子们在城中的来回游行。赤裸的男子们腰间只围着一条腰蓑，这种腰蓑是在举行滨垢离祭典时在海边的村子里用山的好运所交换来的稻草制作的。男人们洋溢着无限活力的裸身游行给人以一种强烈的大海的印象。

⑥“鬼舞”

裸身游行的队伍顺着神社的参拜道路一路奔跑而上，一进入见付天神的社殿中，便开始跳起了令人惊魂动魄的鬼舞。古时，传说这里曾有过一只强求人们供奉活人的可怕的狒狒，后来灵犬疾步太郎帮助人们降服了狒狒，村人们欢喜之极而以狂舞相庆。鬼舞便是对这一传说的再现。相传疾步太郎是信州驹个根的名刹光前寺的饲犬。这个祭祀活动的世界居然扩展到了遥远的天龙川上游的信州的山中。

⑦“山神社的祭典”

在狂喜乱奔的鬼舞中，海的男人们获得了山的生命力。随着山神社祭典的结束，人们从熄灭了所有灯火的漆黑的山中出发，簇拥着见付天神的神舆向着城中飞奔而下。

⑧“渡神”

抬着神舆的队伍象风一样穿行过挤满了人群的漆黑的街道，向着御旅所奔去。这象征着一个新的神灵的诞生和出现，在这一神灵朝气蓬勃的生命中充满了无上的威力。而且，御旅所位于远州总社的淡海国玉神社。因而渡神舆也暗示着远州国魂的诞生。

⑨“祭祀的含义”

第二天是本祭日，由旅所出发的渡神舆的队伍大张旗鼓地由西到东在全城到处巡行。一直到夜里回到本殿，标志着全部祭祀活动到此结束。通过以上的分析我们可以得出这样的结论，即见付的天神祭实际上象征着的是山与海的交欢。见付町作为东海道的驿站，东西向延伸的街道是他们的生活之地，通过与南北向的神圣的自然之路相交叉，而使得自身回到了生命力苏生的神话世界中。进一步而言，从空间上来看，这一祭祀是一个平时所看不到的南北的阳轴与平时生活展开的东西的阴轴相交叉的构造，阳轴连接着海与山，而阴轴则贯穿着人们的日常生活，从而使祭祀场所成为了一个山的象征与海的象征相混在的地方。古时山货与海货的交易市场就存在于这样场所。往常总是在村落最深处的林中神社静处的神灵，一旦在祭祀的时候集聚了山与海的新鲜的力量出现在町上的话，整个町便会成为一个生机盎然的祝庆之市场。

遠江総社淡海国玉神社・見付天神裸祭の概略

薗田 稔（京都大学）

茂木 栄（国学院大学日本文化研究所）

目次

序

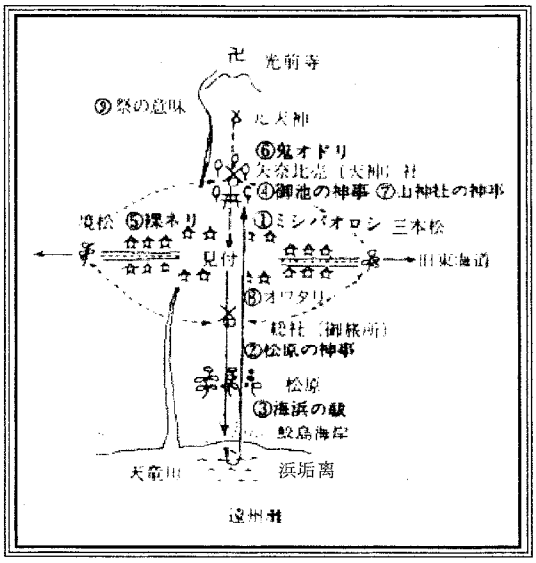
一 矢奈比売天神裸祭の実相

1 祭事始め［旧暦八月二日］

2 浜垢離［旧暦八月七日］

3 神社境内の潔斎行事［旧暦八月九日］

4 宵祭［旧暦八月十日］

5 本祭［旧暦八月十一日］

二 見付天神裸祭のコスモロジー